

## 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	高瀬町立高瀬中学校					教職員
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	34
学級数	3	5	5	1	14	
生徒数	117	174	179	1	471	

## 研究の概要

## 1 研究主題

確かな学力を育てる学習指導のあり方  
——— 個に応じる教科指導の工夫 ———

## 2 研究内容と方法

## (1) 実施学年・教科

学年	教科	選 択 し た 理 由
1年	数学科	生徒の能力差が特に大きい学年で、個別指導が不可欠な教科である。 昨年度から継続研究を進めている教科、及び対象学年である。 学年が進むにつれて、能力差が最も大きくなる教科である。
2年	国語科	
3年	英語科	

## 各教科の主な研究内容

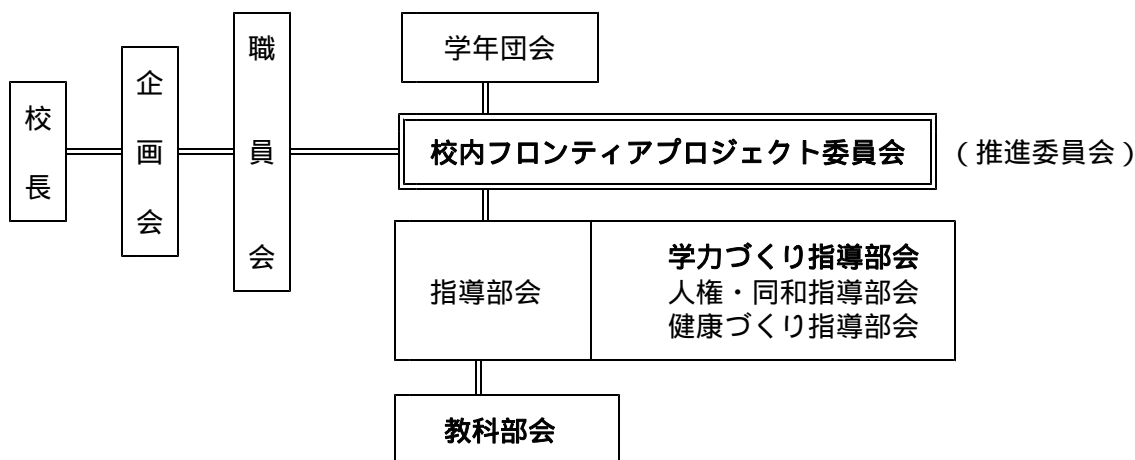
国語科（第2学年） （一斉授業）	数学科（第1学年） （TT指導・習熟度別少人数指導）	英語科（第3学年） （習熟度別少人数指導）
(1) 説得力のある意見文を書かせるための単元構成の工夫 （書くことと討論の関連指導） (2) 小説の中心を読むための単元構成の工夫 （基礎的・基本的な読みから個性的な学習へ） (3) 国語検定の継続 （漢字・文法・古典） (4) 言葉への興味・関心を高める語彙指導の継続 ・「ことわざ辞典づくり」	(1) 効果的な少人数指導のあり方 ・実態に応じた段階的な移行 （TT等質 習熟度別） (2) 個に応じた補充学習の実施 ・目標の明確化 ・到達すべき最低基準の設定 ・形成テストの実施 (3) 補充・発展学習についての研究 ・学習内容・方法・形態 ・教材開発	(1) 基礎・基本の定着 ・ノート指導 ・単語検定 ・音読指導 (2) 効果的な習熟度別少人数指導のあり方（1クラス2コース） (3) コースに応じた効果的な指導の工夫 ・ワークシートの作成（補充・応用） ・スキット（暗記とオリジナルスキットの作成） ・コミュニケーション活動の場の確保 ・教材・教具の開発

## (2) 年次ごとの計画

テーマ 「基礎の定着を図る漢字・語彙・作文指導の工夫」		
平成14年度	4月	・年間計画の立案、研究組織作り
	5月	・実態調査（アンケート 1年生を対象に）
	6月～1月末	・研究授業の実践（6月 9月 10月 1月の計4回）
	8月	・校内研修（プロジェクト委員会、教科部会）
	9月～1月末	・校内検定及び国語検定の実施と実態分析
	2月上旬	・研究報告（1年次の成果と課題）
	2月中旬	・校内研修（外部講師による講話）
	3月	・本年度のまとめと次年度の計画

年度	月 日	研 究 内 容
平成15年度	4月～5月	・年間計画の立案、研究組織・研究内容の検討
	6月～11月末	・研究授業と研究討議（具体的な実践）
	6月27日	英語科の研究授業と研究討議・指導 「Let's Chat 2（行ったことある？ことばのつなぎ方）」
	8月21日	国語科の「書くこと」の学習指導について（教材研究） 「意見文を書こう」の実践を中心に
	9月初旬	・校内検定の実施と実態分析
	10月10日	数学科の研究授業と研究討議・指導 「文字式」（基礎問題と章の問題）
	11月6日	公開授業（第2学年4組 国語「走れメロス」）と研究討議・指導 単元名 「小説を読み味わおう」
	11月12日	英語科の研究授業と研究討議・指導 「Speaking Plus 4（「買い物」買い物をする、申し出る）」
	1月上旬	・校内検定の実施と実態分析
	1月～ 2月中旬 3月	・研究のまとめ ・研究報告（2年次の成果と課題） ・本年度のまとめと次年度の計画
平成16年度	4月～5月	・研究授業と指導法のまとめ
	6月	・選択教科における「発展・応用」の授業の研究
	7月～8月	・個に応じた指導方法と評価のまとめ
	9月	・校内検定の成果と課題のまとめ
	10月	・生徒、保護者へのアンケート（変容の分析）
	10月	・実態調査による分析
	11月 12月	・生徒の変容による成果の確認と分析 ・研究報告

### (3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

#### 1 研究の成果

本年度は、国語科・数学科・英語科の3教科を中心に基礎・基本の定着を図ると共に、生徒個々の能力や個性に応じた教科指導のあり方について研究した。

(1) 国語科 (第2学年)

ア 実施学年・教科 第2学年国語 (昨年度からの継続研究 男子82名、女子92名 合計174名)

イ 研究計画

(ア) 研究主題 「書くこと」と「読むこと」の領域における単元構成の工夫

(イ) 具体的な研究内容

A 「書くこと」(「意見を書こう」)について

研究の視点	生徒に関心のある論題の設定 思考の過程や書く手順を明確にしたスモール・ステップ法やモデル作文の提示 意見の根拠や反論を鍛えるためのディベートの活用
-------	---

B 「読むこと」(小説「走れメロス」)について

研究の視点	対比と変容を中心にした基礎的な読み方の習得 終末段階で生徒の興味・関心を生かすコース別学習の設定
-------	---

(ウ) 研究授業計画

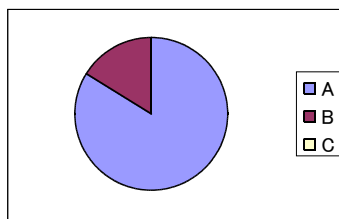
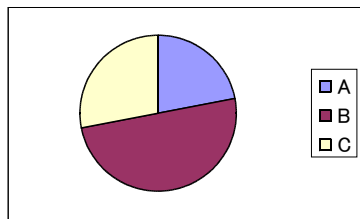
月日	単元名(題材名)	単元構成のポイント	指導者
11月1日 ~10日	「意見文を書こう」 (「討論を楽しもう」との関連させて)	・根拠や反論の明確な意見文を書くための「書くこと」と「話すこと・聞くこと」の関連指導	香川大学教育学部附属坂出中学校 佐藤宏一先生
10月31日 ~11月7日 11月6日 (公開授業)	「小説を読み味わおう」 題材「走れメロス」 (太宰 治)	・小説の基礎的な読み方と個を生かすコース別学習の設定 公開授業(第2学年4組)と研究討議	香川大学教育学部 教授 山本茂喜先生

ウ 研究の成果と課題

(ア) 「書くこと」(「意見を書こう」)について

< 第1次の作文 >

< 最終の作文 >



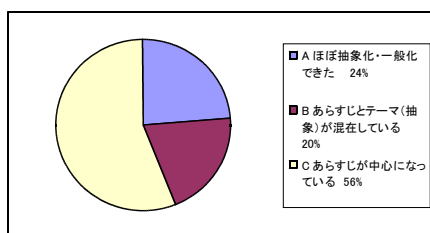
A 根拠が3つ以上で、反論も文章構成も整っている	(22%) → (84%)
B 根拠は2つで、反論は弱い、文章構成はほぼ整っている	(50%) → (16%)
C 根拠が1つで、反論が弱く、文章が不完全である	(28%) → (0%)

実践後、意見文を書かせると、同じ時間でほぼ全員の生徒が最後まで書き上げることができた。また、内容的にもA段階の生徒が、当初の22%から84%に増えC段階は0%となった。このように、元来「書くこと」と「話すこと・聞くこと」は、思考のプロセスは同じなので、関連指導が有効となるのであろう。今後も、効果的な関連指導に取り組んでいきたい。

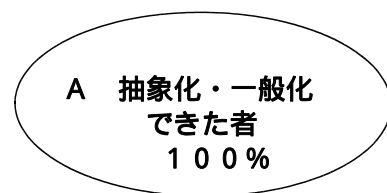
(イ) 「読むこと」(小説「走れメロス」)について

生徒の反応の変化より

< 初発の反応 >



< 4限目の授業後 >



(ウ) 授業を終えて

最終の授業後には全員の生徒が物語の中心を書くことができた。この実践をとおして、登場人物の考え方を対比したり、前半と後半の変容に注目して読んでいくと、全員の生徒が物語の中心を捉えられることができた。この学習方法は、生徒に分かりやすく、他の小説の学習に応用できる有効な指導方法である。終末のコース別学習は、新鮮だったためか好評であったので、今後も継続して研究していきたい。

エ 全体をとおして

有効的であった学習指導方法

- ア スモール・ステップ法による「書く」過程の開発
- イ 教師のモデル作文・生徒(先輩)の作品の提示
- ウ 対比と変容に注目した小説の基礎的な読み方

今後の課題

- ア 生徒の話し合い活動の教材化
- イ 個の読みを生かす学習指導の工夫
- ウ 漢字力・語彙力の育成

(2) 数学科 (第1学年)

ア 実施学年・教科 第1学年数学 (男子62名、女子55名 合計117名)

イ 研究計画

(ア) 研究主題 「数学科におけるTT指導及び習熟度別少人数指導のあり方」

(イ) 具体的な研究内容

少人数指導のこれまでの成果を利用し、他学年への導入を試みることにした。

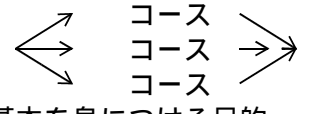
次にあげる理由により今年度は1年生を対象とする。

数学に苦手意識を持っている生徒の大半は、1年時の学習につまずきが見られ、学習を展開する上で最も身につけておかなければならない内容を当該学年では含んでいること。

小学校との連絡会から、基礎計算力などでは個別指導の必要な生徒が多く、算数に苦手意識を持っていることを情報として得ていること。

小学校で少人数指導が実践されている学年であること。

しかし、5校区からの生徒が中学校で新しい集団をつくるため、人間関係の様子を把握する必要がある。特に、習熟度別編成を導入するにあたり基礎コースの生徒を軽視しない素地づくり”なかまづくり”をしていく期間が必要なため、1学期はTT主体で授業を進めていくようにし、導入時には以下のように研究をすすめていくことにした。

研究課題	経過
TTと少人数指導の授業形態について  コース分けの工夫	平成15年度  TT コース選択 (自己評価テスト)  コース コース コース TT  コース・・・基礎・基本を身につける目的。 コース・・・基礎・基本と分析力を身につける目的。 コース・・・応用力まで身につける目的。 上記の3コースに分け、2コースを教員一人がコース別学習をし、1コースを教員一人であたる。2コースの合わせ方は必要に応じて + のようにすれば教え合い学習もできるので、研究によっては幅広い授業展開を期待できる。

少人数指導の利点として、

習熟度別編成ならば学習内容の定着度に応じて授業の速度が調整できる。

個々の生徒の力を把握しやすく個別指導を充実することができる。

があげられる。そのため、各单元ごとにある「練習問題と章の問題」で本年度は少人数授業をスタートさせることにした。

「練習問題と章の問題」は学習の定着度によって速度差が大きくあられる時間であり、コース別学習によってどの生徒も課題を持たせることができる。また、全内容を復習することができるので コースを選んだ生徒には基礎・基本を再度定着させるのによい時間である。

ウ 研究授業計画

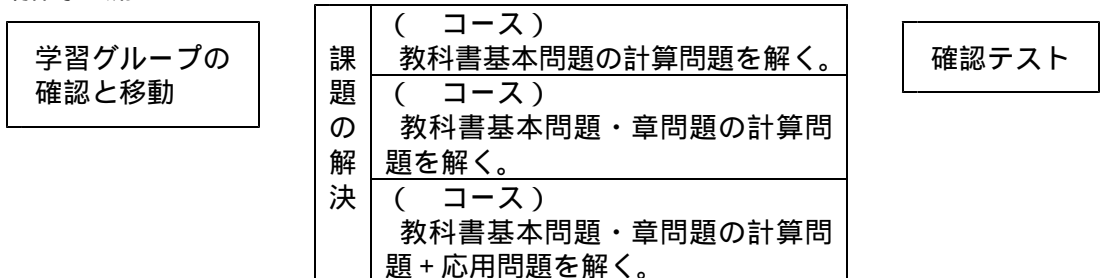
月日	单元名(題材名)	授業のポイント	指導者
10月10日	「文字式」	・基礎問題と章の問題 ・TT 少人数学習	香川大学教育学部附属坂出中学校 半山章人先生

单元「文字と式」...文字の使用については抵抗感を持つ生徒が多いため、特に コースでは定着を確実にする工夫した。

目標  
・自分の計算技能を伸ばそうと意欲的に取り組むことができる。  
・自分が選択したコースの計算ができる。

学習形態  
生徒の習熟度に応じた3つのグループとし、 コースが別教室で学習し、  
・ コースが教室内の2カ所でコース別学習をする。

学習指導の流れ



## エ 研究の成果

単元「正と負の数」「文字と式」の授業展開はコースによって大きく変わることはなかったので、TT授業主体にすすめてきた。しかし、これからの単元「比例と反比例」では文字を変数として捉えられるように個に応じた指導方法が必要になる。式だけで理解できる生徒、具体物や表を何度も使いイメージを身につける生徒と段階を用意した細かな配慮が必要であろう。「基本問題と章の問題」だけではなく、昨年まで行っていた平素の授業での少人数指導をしていくつもりである。

### (3) 英語科 (第3学年)

ア 実施学年・教科 第3学年英語 (男子 88名 女子 92名 合計 180名)

#### イ 研究計画

(ア) 研究主題 「英語科における効果的な習熟度別少人数指導の工夫」

#### (イ) 具体的な研究内容

個人差(習熟度や理解の速度, 興味関心など)を配慮した学習内容や指導法によって, 生徒の学習意欲を高め主体的な学習を促す。

英語に慣れ親しむ機会を増やすことで, 英語を使うことに対する抵抗感を減らし, 自信を持たせる。

それぞれのコースに適する教材の開発を協力して行い, 個に応じた課題に取り組ませる。

#### ウ 研究授業計画

月 日	単元名(題材名)	授業のポイント	指導者
6月27日	「Let's Chat 2」 (行ったことある?ことばのつながり)	・習熟度別少人数指導 ・コース別に適する教材の開発	香川大学教育学部附属坂出中学校 中野光夫先生
11月12日	「Speaking Plus 4」 (「買い物」 買い物をする、申し出る)	・習熟度別少人数指導 ・コース別に適する教材の開発	香川県教育委員会事務局西讃教育事務所 福岡利信先生

#### コース別の違い

コース	目 標	活 動 内 容
基礎コース	・店員(教師)の話を理解し、自分の希望の品が買える。 ・基礎的な買い物表現を書いてまとめられる。	・教師が店員になって、客になった生徒と買い物練習をする
発展コース	・生徒同士で買い物キットが作れる。 ・ドルや消費税も入れたオセティックな(本物の)表現に挑戦できる。	・生徒同士がペアで店員と客になって御練習をする。 ・A L Tの店で買い物に挑戦する。

## エ 研究の成果

アンケート結果からの分析 (平成15年11月実施)

(ア) 少人数指導により、意欲・関心が高まったか。

Aコース(基礎)は、ほとんどの生徒が意欲・関心の高まりを感じている。その理由としては、

- ・授業の雰囲気と和やかである。
- ・ゆっくりしたペースで教えてくれる。
- ・間違っても安心して学習できる。

Bコース(応用)は、「そう思う」と答えた生徒と「どちらとも言えない」と答えた者がそれぞれ46人いる。高まりを感じている理由としては、

- ・スムーズに勉強が進むので、集中して学習に取り組める。
- ・予習等をまじめにするようになったなどがある。

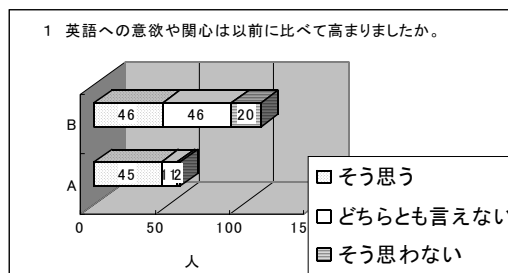
考察としては、Aコースの生徒の意欲・関心の高まりは少人数指導のはっきりとした効果であると言える。また、Bコースは、まだまだ生徒のニーズに応じきれていないとは言えない。

(イ) 少人数指導になり理解できるようになったか。

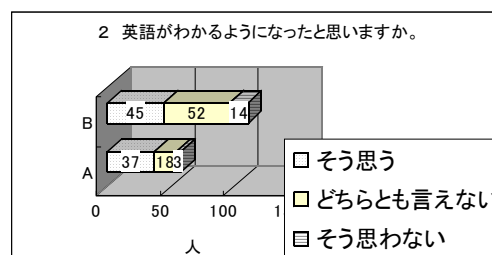
Aコースは、理解できるようになってきたと満足している者が多い。

理由としては、

- ・ゆっくり、ていねいに教えてくれる。
- ・友達と楽しく学習できる。



・ 教師がわかるように教えてくれる。  
 などが、多く見られた。  
 Bコースは、「英語がわかるようになった」という意見よりも「どちらとも言えない」と答えた人数の方が多い。これは、全体の半数ほどにあたり、その理由としては、「これまでの一斉授業とあまり変わらず、少人数指導だから理解できるようになったとはっきりとは言えない。」だった。



## 2 今後の課題

- (1) 個に応じた指導を推進する場合、生徒の個人差が多様化しているため、2コースおよび3コースに分けるだけでは不十分な場合がある。しかし、現状の教員数や教室等の関係から、さらにコースを増やすことは困難である。
- (2) 少人数指導を実施するには、今まで以上に教師の打ち合わせ時間と教材研究等の時間が必要になる。多忙な中で、この時間をどのように確保するかが今後の課題である。
- (3) 基礎コースと応用コースの学習内容の共通点と相違点をさらに比較検討して、個に応じる指導を工夫改善していく必要がある。
- (4) 校内検定に意欲的に取り組む生徒は増えてきたが、不合格者への指導が十分とはいえないので、今後検定の実施方法や事前・事後指導を改善したい。
- (5) どのような学習形態をとっても、学習の原動力となるのは生徒の学習意欲である。生徒の意欲を喚起できるような評価のあり方について研究していきたい。

学力把握のための学校の取り組みについて

- ・ 学習状況調査（年1回）
- ・ CRT（観点別到達度学力検査、年1回）
- ・ 学習の診断（年1回）
- ・ 校内検定（年間2回 国・数・英）
- ・ 教科検定（本年度は、5回程度）

フロンティアスクールとしての成果の普及について

月 日	場 所	対 象	主 な 内 容
6 / 20	三豊合同庁舎	・ 学力向上フロンティア西讃地区協議会委員	・ 研究計画と1学期実践の概要の説明 ・ 研究内容と研究計画及び実践上の課題についての指導・助言
11 / 6	高瀬中学校	・ 地区国語科教員	・ 国語科の授業公開と討議
12 / 26	働く婦人の家	・ 学力向上フロンティア西讃地区協議会委員	・ 研究成果についての説明 ・ 評価の方法及び評価の公開について指導・助言
2 / 5	各中学校	・ 三観地区教科理事・主任	・ 研究成果の説明 ・ 評価の方法及び評価について指導・助言
2 / 20	働く婦人の家	・ 学力向上フロンティア西讃地区協議会委員 ・ 三豊地区中学校教頭	・ 今年度の実践報告会 ・ 成果に対する評価と次年度の課題について

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校	
【学校規模】	3学級以下	4～6学級	
	7～9学級	10～12学級	
	13～15学級	16学級以上	
【指導体制】	少人数指導	T・Tによる指導	
	その他		
【研究教科】	国語	数学	外国語
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無